

平成22年度

第1回ポルトガル共和国アブランテス市青少年派遣訪問団報告書

平成22年7月30日（金）～8月7日（土）



【青少年派遣訪問者】

仁木 桃太郎（人吉市立第一中学校 3年）
橋本 歌織（人吉市立第一中学校 1年）
垣田 健斗（人吉市立第二中学校 3年）
北里 莉早（人吉市立第二中学校 2年）
杉本 慧和（人吉市立第三中学校 1年）
吉開 由佳里（人吉市立第三中学校 3年）
永井 大紫（熊本県立人吉高等学校 2年）
白濱 楓美子（熊本県立人吉高等学校 2年）

【引率者】

谷口 里佳（人吉市立第二中学校教諭）
井上 敬明（人吉市役所市長公室企画課）

【主な訪問及び視察先】

1 リスボン市内の歴史的建造物等（8月1日）



「ジェロニモス修道院（世界遺産）」
大航海時代の富によって建てられたポルトガルで最も華麗な修道院。マヌエルⅠ世が16世紀初頭に建築を開始、完成したのは19世紀。ヴァスコ・ダ・ガマと詩人のカモンエスの棺がある。「天正少年施設団」も立ち寄った記録が残っている。

「ベレンの塔（世界遺産）」

リスボンに出入りする船を監視する水上要塞で、16世紀初頭に建てられた塔。3階建てで、地下には水位の変化を利用した政治犯の水牢もあった。現在内部は博物館になっている。塔の上からテージョ川を眺めることができる。





「発見のモニュメント」

大航海時代に活躍した帆船型のモニュメント。ポルトガルの英雄エンリケ航海王子を先頭に約30人の像が立ち並ぶ。広場中央地上には世界地図が描かれており、大航海時代にポルトガルが新しい国に到達した年が刻まれている。日本は1541年。

2 アブランテス市到着（8月1日）



アブランテス市に到着するやいなや、ホームステイホストファミリーや市関係者と合流。

ホストファミリー生徒達のラテン系の圧倒的なノリに、始めは戸惑い気味の日本訪問団であったが、片言の英語とボディランゲージで何とかコミュニケーションをとっていた。

そして、8月1日は日本代表「仁木桃太郎」くんの15回目の誕生日。遠く最果ての地で、しかも初対面の異国の方々に盛大な誕生パーティーを開いていただいた。

この想いもよらぬサプライズイベントに当の本人もビックリしており、時差が日本と8時間あるため疲れもあったが、時差も忘れ楽しんでいた。



3 アブランテス市役所（8月2日）



アブランテス市役所（小さい・・・）



歓迎式典（副市長と記念品交換）



訪問団全員が緊張の趣の中、アブランテス市役所に到着。昨年のような大掛かりな歓迎式典ではなかったが、市役所の前は市民の憩いの場となっており、アブランテス市民全員が滅多に見ることのない私たち東洋の神秘一向を食い入るように注目していた。

マリア市長が公務で不在のため、代理で副市長に対応していただいた。親書を読み上げ、本市からは記念品として「茶器」「お茶」「きくらげ」「昆布」をお渡しした。一方、アブランテス市側からは、「アブランテス歴史市史」及び「アブランテス市写真集」をいただいた。

4 アブランテス市スポーツ・シティ施設（8月2日）



市が所有する陸上競技場を訪問。スポーツゾーンとして施設を一箇所集中している。隣接する施設に野球場、サッカー場、プール、サウナとジャグジー付きのアスレチックジムがある。

近年、アブランテス市はスポーツ教育に非常に力を入れており、各種スポ

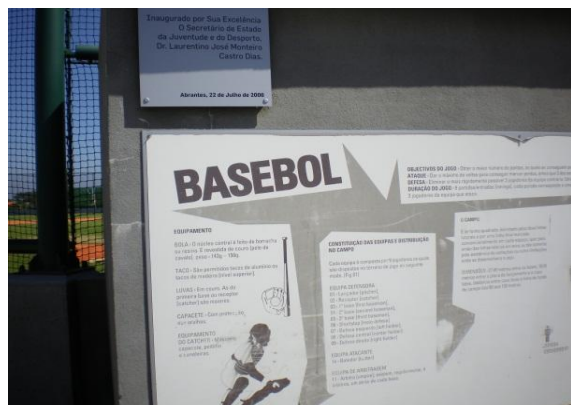
ーツ大会を当該市で行うことにより、観光も視野に入れた経済活性化を行っているとのことであった。



プールは平成16年に出来上がった比較的新しい施設。総工費約4億5千万円。スポーツ財団からの補助金が出るため、市の持ち出しはほとんどないとのこと。プールは全天候型の開閉式の屋根をついており、水深は浅い所で1.7m、深いところで2.0m。おもに水泳競技に用いられるが、水球の国際大会にも使用され、大会当日が多くの異国の人で市全体が賑わうらしい。



初日目で、なおかつ、ほぼ初めて目にする異国の人間に戸惑いと隠せない本市の訪問団であったが、「スポーツに国境はない」の言葉どおり、言語は通じなくてもスポーツを通じて完全にポルトガルの子供達と打ち解けることができたようであった。



昼食後は、近年ポルトガルでようやく普及してきた「BASEBOL」（野球）を全員でやることになった。日本はもちろん各国では「BASEBALL」だが、どうやら本当に看板のつづりは間違えているらしい。ポルトガル共和国の中で、野球場があるのはアブランテス市のこの球場のみ。一応、アマチュアチームがあり、普段この球場で練習している。そのチームの監督とメンバー数名に当日対応していただいた。

準備運動に始まり、ノックと続くわけだが、その実力は目を見張るものがあった。はっきり言って、向こう１０年間はポルトガルという国が野球の国際試合に出てくることはないと思うと日本訪問団全員が感じた。理由は以下に記す。

※ノック（監督自らがバットに当たらない。空振りばかり。）、キャッチボール（軟式ボールではなく、硬式ボールを使用しているため手が痛い。肩も壊れそう。）、ゲーム（こちら硬式ボールを使用。しかもソフトボールのプレート位置から思い切り投げため、誰もバットに当てることができない。しかもキャッチャーも取れないため、「振り逃げ」ばかりで所謂「鬼ごっこ」ゲームになっている。



隣接するサッカー競技場。

ポルトガルの至宝であるクリスティアーノ・ロナウドも、かつてジュニアチーム時代にこのグラウンドで練習をしていたらしい。



現役ソフトボール選手（谷口先生）によるソフトボールピッチング直接指導。かつてザビエルが異国の宗教を日本に伝えたように、今回の指導が、ポルトガル球界にとって、ソフトボール伝来の始祖となるかもしれない。

夕方18時からは、最近アブランテス市にて流行っている「太極拳」講座に訪問団全員で参加する。講師は昼間お会いした野球の監督。この方はこの他に「忍者」講座も開かれているらしい。多彩な趣味の持ち主であった。



5 アブランテス市内建造物（8月3日）

「ペティ・パーカー」と呼ばれるゲーム形式で行われた。ゲームの内容は質問に沿って市内の歴史建造物を探し当てるもの。隈なく市内の主要な建物を廻るような英語での質問内容となっており、生徒達には勉強も兼ねた、飽きることの無い作りとなっていた。

約25人を4チームに分け、チームリーダーを決め、早さと正確さを競った。



真剣な表情で、通訳（菅氏）の方の説明を聞く日本訪問団。それ以上にポルトガルの生徒達は「勝ち」に対しての意識が貪欲であり、結果に対してものすごいクレームをつけていた。

以下はアブランテス市の城跡と市内の全景。



6 シスタス青少年協会（8月3日）



ワインのコルクを主に製造している工場（協会）を訪れた。私達が訪れた1週間前に日本の企業がこの地を訪れており、日本への輸出が成立したらしい。



日本へ輸出されるコルク製品の山積み。1箱が約4,000円。船（海路）で約2ヶ月掛けて日本へ運ばれる。

ちなみに日本の会社は「東亜コルク株式会社」（本社：大阪）

7 レモンホス・デ・アグア青少年協会（8月3日）

一つの村集落の青年団で「レモンホス・デ・アグア青少年協会」という組織を作っている。自分達の活動資金を様々な活動で賄っており、決して裕福ではない各家庭の収入の一角を担っている。右写真は舞台活動のステージ。

その主な収入源の一つが「ソーセージ」製作である。相当人気があるらしく他の地域からも買いに来る人が多い。





ソーセージが出来上がるまでの行程を一部始終視察させてもらった。衛生管理は厳しく、ソーセージ工場の中に入るには、帽子、スリッパ、衛生白衣の着用を義務付けられた。

この工場を見るのはアブランテス市の生徒も初めてだったようで、真剣に視察をしていた。



工場内で日本製のバイク（ヤマハ）を発見。思わず写真に撮ってしまった。

8 アクアポリスで日本料理パーティー（8月3日）



夜は、日本訪問団手作りによる日本料理パーティーを催された。献立は「卵焼き」「味噌汁」「豚のしょうが焼き」「大学いも」等々。ホストファミリー宅での調理のため、材料や調味料が揃わず、製作者側からしたら不本意だったようだが、味のほうはなかなか好評であった。

9 アルディア・ド・マトス（川原）（8月4日）



この日は、朝から移動バスに乗り、川原へ移動。壮大なテージョ川の支流にあたる川らしいが、市が管理する遊泳場となっていた。水深は相当深く、足は到底着かないが、お年寄りや子供でも楽しめるように、木枠で囲った底に網の張ってある遊泳施設が設置してあった。水質に関しても、相当厳しくチェックされており、水質基準を満たさないときは、遊泳は許可しないとのことであった。遊泳は無料で、インストラクター兼ライフガードが2名常駐していた。このような施設からも、アブランテス市がスポーツ教育に力を入れているのが理解できる。

※ 昼食及び休憩（8月2日～4日）



昼食は3日間とも公園に隣接するコテージで食べた。バイキング形式となっており、食生活文化としては炭水化物がメインであった。日本と違って、1日5食が通常のサイクルであり、現地の方の肥満率とエンゲル係数は相当高いようである。右の写真は昼食後に公園で遊ぶ子供たち。ポルトガルの1日のサイ

クルとして、昼食は１３時にとり、昼食後はすぐに働かず１時間ぐらい休憩時間をとる。ちなみに夕方の１７時ぐらいに間食をとり、夕食は２０時ぐらいとなる。



８月３日の昼食時に、公務を終えアブランテス市に帰られたマリア市長とようやく対面することができた。

左の写真は、激務のため首が痛いマリア市長を、通訳の菅さんがマッサージをする一面。

１０ アクアポリス（８月４日）



８月４日の午後はテージョ川に隣接する「アクアポリス」でのスポーツ活動。川原を浜辺に見立てており、遊泳をはじめ、フットサル、ビーチバレーができる施設として市が整備したもの。気温は４０度近く、砂の照り返しもあり相当暑いが、湿度が少なく、日陰に入ると涼しく感じられるのもこの地域の特徴。



11 カラオケパーティー（送別会）8月4日



夜は、マリア市長をはじめ、ホストファミリーや関係者を全員で送別会を催してもらった。マリア市長が遅ればせながら日本語で歓迎の挨拶。記念品とともに、今回の交流を記念したTシャツを訪問団全員にいただいた。アブランテス市側制作によるTシャツはこれが第2弾目となる。しばらくの歓談の後は、お互いの国の共通言語とも言える英語による歌で盛り上がった。



左側の写真は、パーティーに出席していただいた前市長であるカルヴァーリョ氏との2ショット写真。右側が今回のホームステイに関して多大な尽力をいただいたアブランテス市国際交流協会会長のジョセフさん夫妻。人吉で言うと赤山会長と同じ職にあたる。

1 2 別れの朝（アブランテス市出発）（8月5日）



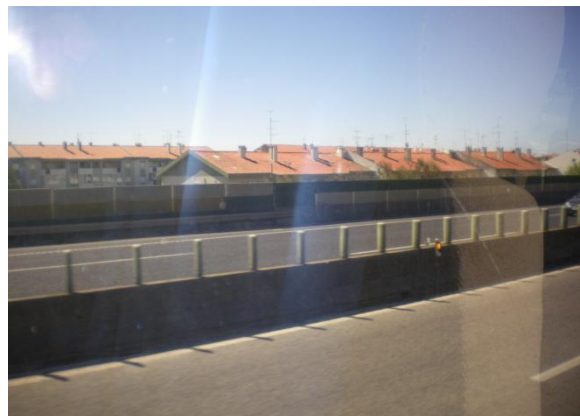
あっという間の3日間。仲良くなったところに別れはやってくる。昨夜いただいた記念Tシャツをみんなで着てのお別れ。電話番号やメールアドレスを交換する生徒、別れを惜しんで泣き出すアブランテスの生徒もいた。別れを惜しむ時間約30分。9時30分の出発予定が10時00分の出発となった。

1 3 リスボン市内散策



大使館へ向かうため、電車を乗り継ぎ、リスボン市内へと向かった。急ぎ足のため、じっくりと散策することはできなかったが、「サンタ・ジェスタのエレベータ塔」だけは唯一見る事ができた。カルモ通りにある展望台で、リフトは高さ45メートルもあり、鉄製である。1台に当たり1度に24人が乗れる。

右側の写真はリスボン市郊外の家屋。この家屋に限らず、ポルトガルの民家や家屋はほとんどがオレンジ色で統一されている。理由は大量生産のため値段が安いことによるもの。



14 在ポルトガル日本国大使館

いよいよ今回の訪問の最終目的地である「在ポルトガル日本国大使館」へ。本来の訪問時間は午前11時30分であったが、急遽、三輪全権大使が不在となったため、午後4時からの訪問となった。想像とは違い、ビルの6階に位置しており、受付で用件を告げ、エレベータで6階へ。当たり前であるが、ここがポルトガルの中の唯一の日本国である。久しぶりに会う異国の地での日本人との会話にホッとする。聞くとところによるとポルトガル共和国に在住する日本人はわずか600人程度とのこと。入室の際には全員携帯電話を事務室に預けなければならないほど厳重な審査があった。

三輪全権大使からは、今回の訪問の目的や人吉・球磨の現状を聞かれ、生徒には、アブランテス市を訪問した際の感想など一人ひとりに聞かれた。



三輪全権大使と宮川二等書記官との集合写真。この時点で2人少ないが、リスボン市内の人混みの中で急に具合が悪くなった生徒が一人いたので、先生とともに大使館には入らず、外での待機となった。

写真の一番右側が三輪昭全権大使。

15 ヘルシンキ空港にて（8月6日）

フィンランドにある「ヘルシンキ空港」にて中部国際空港行きの便を待つ生徒たち。待合場はほとんどが日本人ばかりで、他のお客さんと旅での思い出を談笑する一面もあった。

この時点でみんなの感想は一同みな「日本に帰りたくない・・・」。



16 そして人吉市へ



そしていよいよ家族が待つ人吉市へ到着。解団式においては市長が「本当にお疲れさま。今回の旅に当選したくじ運を褒めてあげたい。」との訓示。

家族を前に代表して高校生の永井くんと白濱さん。引率2名が挨拶。

解団式を終えて一路自宅へ。

【アブランテス市訪問を終えて】

昨年までの訪問者から話は聞いていたが、人を迎え入れる「もてなしの精神」にはすばらしいものがあった。ポルトガル地域はみなそうらしいが、アブランテス市民はマリア市長を筆頭に、心からのもてなしを心がけているようであった。街並み、街づくりに関しても率直にいうと人吉市に似ている。市の真ん中に大きな川が流れており、そこでカヌーができること、また、野球場があること等々、姉妹都市としてふさわしく本当に相性が良いと感じた。マリア市長に市政方針を尋ねてみたところ、「企業・観光客誘致」「低所得者失業対策」「スポーツをはじめとする教育」に力を入れているとのことであり、本市の市政方針ともほぼ合致するようであった。

また、今回訪問団のうち2名が高校生、6名が中学生であり、全員が大規模な、しかも海外への渡航は初めてという生徒たちばかりであった。特に中学生に関しては、まだまだ無邪気な一面もあり、語学的には共通言語である英語があまり理解できないこと、体力的には長時間の移動に耐えうるかといった点では多少厳しかったかもしれない。高校生程度の英語力があれば、また違った感性・気持ちでの交流ができたのではないかと感じた。また、旅の途中で右往左往する出来事もあったので、全員が所期の目的が果たせたかどうかは正直わ

からない。しかしながら、感性豊かな若い時期に異国の文化や人々と触れ合う機会があったことは本当に貴重な経験であり、各々の人生を左右する分岐点にもなったことは間違いないと思う。今回の訪問を人生の糧として、私自身も含め国際感覚豊かな人間に育つことを期待する。

【今後（来年）の取組について】

マリア市長をはじめ、アブランテス市側から提案があったこととして、ポルトガルの生徒の夏休みは通常3ヶ月（7、8、9月）と長期に渡るらしく、気候的な条件や日本の夏休みとの違いを考慮したうえで、来年の7月末あたりにアブランテス市の生徒を人吉市に訪問団として送りたいとの提案があった。但し、そのためには金銭的な面で非常に厳しいらしく、三菱ふそう等の日本企業から補助金を捻出してもらうこと、パーティー等を開いて資金を稼ぐ必要があるとのことであった。

また、来年の本市からの訪問団受け入れ態勢に関しても提案があり、アブランテス市が姉妹都市提携を結んでいる都市が日本をはじめ、フランスや南アメリカ等数ヶ国に跨っているため、そのうちのどこかの国において合同で林間学校のようなものを実施したいとの提案であった。詳細については今後の協議となるが、様々な形でアブランテス市との国際交流が末永く展開されることを切に願っている。

【アブランテス市豆知識】



地理：テージョ川右岸から標高1mの丘の上にある。ガヴァイアンからコンスタンシアまでの川谷全体が標高1mほどである。

経済：アブランテス市は近接する地域の産業及び農業のハブ地となっている。金属加工、機械工業が行われている。